

# 県北 どらくろあ

第74号 2022年5月1日（毎月1日発行）

## 芸備線ストロール⑥ 道後山駅

### 「中国地方一の鉄橋と 溪流沿いの秘湯」

4月11日月曜日、車で備後落合駅に向かった。すでに昼を過ぎていた。落合駅から新見行きは一日、三本しかない。6時41分、14時37分、20時12分。6時台はきついで、14時台の便を利用するしかない。

早めに出かけたのは、列車に乗る前に見ておきたい所が

あったため。落合駅を通り過ぎて、そのまま先に進んだ。すぐに道路が分岐している地点に出る。国道183号と314号が重複している区間が、そこでもまた分かれるのだ。直進すると183号線、右に折れると314号線。芸備線の

鉄道は183号線沿いに登って、途中から大きく曲がっ

て（県道444号油木小奴可線）、道後山駅に着く。いつものように道後山駅から落合駅まで歩くとすると、線路沿いに大回りして183号線に出る道（6・8キロ）と、314号線に出て湾曲部を

ショートカットする道（4・1キロ）がある。いささかルール違反だが、183号線の方は、車で行くことにした。

お目当ては小鳥原（ひととばら）第一橋梁（写真下）、高さ30メートル、長さ146・2メートル、中国地方では一番高い鉄橋である。最初に高



小鳥原第1橋梁を含めて3つの高架鉄橋がある

い鉄橋が見えて、これだろうとパシャパシャ写真を撮った。その先にも鉄橋がある。そして、さらに先にも鉄橋があり、「第1小鳥原橋りょう」と白いペンキで書いてある。三度目の正直だった。最初が「第2小鳥原橋りょう」で、二番目が「宮ノ脇橋りょう」。いずれも高所にある立派な鉄橋で、芸備線の鉄道敷設の困難さ、大変さがよくわかる。

183号線沿いにある庄原市八鉾自治振興センター（旧小鳥原小学校1階）を訪ねて、「ヒバゴン出沒50周年記念誌『HIBAGON BOOK』」2020改訂版を購入。木次線の油木駅周辺にヒバゴンの目撃情報が多く、油木駅を訪問したときに行ってみたいと思った。

落合駅の前に車を停めて、14時37分発の新見行きに乗った。前回で紹介したが、14時41分発の宍道行き（木次線）、14時43分発の三次行きの列車の3車両が落ち合う場面を、実際に見る事ができた。写真撮る観光客は思いのほか少なく、新見行きの車内の乗客も私を含めて6人。

列車はたちまち山中にのみ込まれて、両方の窓から木々が迫ってくる。山の急登なの

で、歩くような速度に落ちている。あえぐように、車輪が線路を擦る音が聞こえてくる。トンネルも多い。数えると、道後山駅までに4つ。窓を開けて手を伸ばせば、湿った外壁に触れられそうな小さなトンネルだ。それだけに、鉄橋を渡る時の眼下の景色は開放感がある。

乗車時間15分弱で道後山駅に到着料金は210円、降車したのは一人だけだ。海拔614メートル、落合駅が462メートルだから、一区間で150メートルぐらい登ったことになる。

駅舎の反対側の開けた丘が、「高尾原（たかおばら）スキー場」があった。



た場所で、丘の上にはまだ看板が残っている。昭和27年開業で、駅から気軽に寄れる小スキー場として賑わったが、駅利用者の減少とともに客足は遠のき、近年に閉鎖されたという。これらの情報は、駅舎に置かれた手作りの小冊子「ようこそ道後山駅へ」で紹介されている。

待合室には他にも、たたら製鉄の名残である「かなくそ」が展示されている。溶岩に似ているだろうか。砂鉄から金属を精製するときに出る不純物の塊で、鉄滓、スラグとも呼ばれる。道後山駅近くには細川たたらがあり、大正6年まで製鉄が続けられていた。『時間があれば、駅周辺



を歩きながら「かなくそ」を探してみませんか？ 15分もあれば一周できます』と解説文に書いてある。残念ながら、近辺を散策しても、それらしいものを見つけることはできなかった。

駅舎の待合室の隣は、消防車の格納庫として利用されている。かつては道後山や猫山のスキー客で賑わい、商店や美容院、映画館もあったという駅前通りは、面影も無く人影は皆無だった。駅舎の前に立つ赤いポストが健在で、人のぬくもりを感じさせてくれる。

かなくその解説文で紹介されていた「細川たたら跡疑定地」（写真上）に立ち寄った。駅から歩いて五分もかからない。疑定地とは、推定される場所という意味。石仏の奥に、金屋子様の小さな社がある。中国地方を中心に、鍛冶屋に信仰される神である。

そのまま道を下って、314号線に出る。あちこちで、満開のスイセンが群生している。自生しているのだろうか。季節もあるのだろうか、土地によって異なる花に歓迎してもらえるのが、芸備線ストロールの楽しみの一つである。

高尾川沿いの国道を下って行くと、赤いひょうたんの大きな看板が見えてくる。「高尾の湯」と書いてある。この地名は「たかお」ではなく「ことうお」と読む。この温泉に入るために、314号線を歩くことを選んだのだ。

ちゃんとタオルも用意している。道後山駅から歩いて30分ほどで、落合駅までの中間地点だろうか。

高尾温泉は溪流のほとりに建っていて、前面に駐車場が広がっている。二階部分が入口。料金は500円で、火・金曜日が休みになる。先客がいるようだったが、玄関に置かれた靴は2足とも女性用で、階段を下りて1階にある男性用の浴室には誰もいない。

浴槽は、家庭用のものをかなり大きくしたようなシンプルなもの、それがかえって新鮮だった。中国地方屈指の強アルカリ鉱泉は無色透明で、少しぬめり気がある。やけどや皮膚病に良く効き、飲めば胃腸病にも効果が高いという。窓ガラスを開ければ、眼前の渓谷から水面を流れる風が入ってきて、火照った体を鎮めてくれる。

風呂上がりに、おかみさんに話を聞いた。かつては旅館や療養者のための自炊棟を営んでいたが、高齢になって一人では負担が大きいため、今は日帰り入浴だけにしているそうだ。ここでのんびり過ごすだけでも癒されると、遠方から来る常連客もいるという。

大の温泉好きで、全国の温泉巡りをしているのに、地元の名湯を知らなかった。湯屋を出て、落合駅に向かう足取りは軽い。しつこい腰痛も、お湯に溶けて消えている――。

## 芸備線ストロール・番外編

# 桜の花を見に行こう！

芸備線ストロールの連載が始まったのが今年の11月。桜の大木や桜並木に出会う機会も多いのだが、残念ながら花のシーズンではなかった。頭の中で、満開の桜の景色を思い浮かべ、春になったら再訪しようと誓っていた。

四月四日月曜日の朝、車で出かけ



た。本当は芸備線の列車を利用したいのだが、本数が限られているので気軽に途中下車ができない。もし、まだ桜が咲いていなかったら悲惨なことになる。

最初は、高（たか）駅の前にある一本の桜の大木（写真上）。七、八分咲きぐらいだろうか。樹肌がゴツゴ

ツして苔むしている。ソメイヨシノには珍しい相当な老木だ。地元の方に訊くと、樹齢は軽く九十年を超えているらしい。花の季節には駅前にカメラマンが陣取って、駅舎の向こうに見えるホームに、列車が停まっている瞬間を狙っているという。桜花と駅舎、列車の共演である。

西城駅方面に向かった。しかし、日当りや樹齢等の条件の違いもあるのだろうか、お目当ての桜並木は、まだ蕾が綻び始めたばかりで早々に引き返した。庄原・上野公園に立ち寄ると、八分咲きぐらいだろうか。

晴天に恵まれて、マスクをした花見客がたくさん歩いている。上野池のまわりに植えられた桜は六百本とも言われ、日本さくら名所百選に選ばれている。それから用事があって三つまで足を延ばしたのだが、もう桜は満開だった。

一週間後に西城を再訪。西城川沿いにある蓮照寺のしだれ桜は有名で、樹齢は約五十年、観光名所になっている。すでに盛りは過ぎていて、緑の若葉が見えていた。

今回のお目当ては、蓮照寺の前の歩道（写真中）だ。「桜植樹記念碑」が建っていて、「昭和五十一年西城町を桜でうめる会」の文字が読み取れる。花は散り始めていて、コンクリートの歩道に花びらが鏝（ちりば）められている。風が吹く度に花吹雪が舞い、歩道や水路、西城川の水面へと降り注ぐ。通りかかる人も無く、どこかで鶯が鳴いている。

さらに一週間後、芸備線ストロールの取材で備後落合駅を訪れたときには、駅前の一本桜（写真下）が満開だった。高駅の桜のように樹齢を重ねて、芸備線も落合駅も、いつまでも健在であることを切に願う。

庄原の不確かな歴史ドラマ——永江の庄から現代まで④

## 福島正則は傍若無人だったのか

### ——伝承が伝えようとしたものは何か

音谷健郎

庄原には、いくつか奇妙な伝承が

残っています。庄原・東本町2丁目の「火村さん」と、西本町2丁目の「藤木の桜」。いずれの言い伝えもおどろおどろしく、為政者に対する庶民の怨念が込められているのではないかと

疑いたくなります。

「火村さん」は、いまでも地元の人たちが毎年、鎮魂祭をしています。「藤木の桜」は、老木ながら毎春、絢爛とした桜を咲かせています。

まず、「火村さん」ですが、旧市街

地から上野池への上がり口にあり、「火村霊神の話」との説明板が目止まります。

それによると、安芸、備後国を修めることになった福島正則が、家来を大勢引きつけてこの地で狩りをしました。その時、木村某という家来が「この辺には羽斑嶋（はまだらしぎ）がたくさんおります。早くお撃ちなさい」と申し上げたら、鼻をたれる癖のあった正則が、「わしを鼻たれとののしるとは何事か」と激高し、自ら薪を取り寄せて、ここで焼き殺し

たというのです。

木村某の遺骸はそのままうち捨てられていましたが、庄原の町がたびたび大火災にあつて焼け野が原になり、誰言うともなく、木村氏の亡霊のしわざとの噂がたちました。処刑の跡のこの地に石碑を建てて怨霊を祀（まつ）ったので、その後は大きな火災はなくなったというのです。

念のために、庄原のいわれを伝える書『永江庄から庄原町へ』（1949年刊）を開いて見ました。かなり詳しく伝えてあります。その上で、自分が火刑にあつたから火事をもって祟（たた）るという類型の伝説と、神に祀（まつ）られた後に火しづめの神となったという形態の2つの説話からなっており、全国的に非常に数の多いものである、としています。

もう一つの伝承の「藤木の桜」は、庄原市天然記念物に指定されています。以前には庄原小学校の敷地内でしたが、いまは同所の「庄原市民会館」の一隅です。説明板によると、ソメイヨシノの一方の親であるエドヒガンの名木で、明治17（1884）年の「庄原英学校」の頃からこの地にある老木だということです。

『永江の庄——』では、「昔からこの老木に触れると祟（たたり）を受



①今も毎年、地元の人に供養されている「火村さん」正面の長方形の碑が「火村霊神之碑」です



②火村霊神之碑の側面に彫り込まれたいわれ書き。苔むしていて所々しか読めませんでした



③藤木の桜は、明治時代の「庄原英学校」から庄原小学校に引き継がれ、庄原文化会館の「今」まで、人々の行き来を見下ろした、まさに歴史の“生き証人”です

ただし同書では、2つの伝承をあわせて封建時代の支配階級であった武士の横暴に対する、庶民の憎悪の感情が潜んでいることを看過してはならない、とあります。「伝承」の項では、「古城址でもなく、城下町でもなかった庄原に残っている伝説は、武士の匂いの強かった土地に残っているものとは、その形態を異にしている」と指摘していて、示唆に富んでいると思えました。

ところで、福島正則は、史実的にも「勇猛な武將」ではあつたが、乱暴者一辺倒ではなく、実務にも長けた武將であつたことも知っておきたいと思ひます。

中央公論社の「日本の歴史」⑬「江戸開府」（辻達也・横浜市大助教授）から、福島正則について記述を拾ってみました。

福島正則は豊臣秀吉の武功派の側近として名をなすが、秀吉の不興をかったときに、家康が取りなしてくれ、家康にも近づいていました。関ヶ原では、家康に惹かれて西軍に組みして手柄をた

けるといわれた」と書き起こしています。昔、藤木某という武士が百姓たちの憎しみを受けて、馬もろとも打ち殺されて埋められた墓跡だといわれており、「これ以上詳しいことは伝えられていない」と、ごくアッサリと触れているだけです。

この桜は春には豊かに花をつけるので、私（音谷）は小学生の頃から「藤木の桜」として知っていました。が、伝承の説明が簡単なので、がっかりしました。

て1601（慶長6）年、広島城50万石の城主となつて広島にやって来ております。

家康の死後3年目、2代目秀忠の治世の1619（元和5）年、無許可で居城広島城を改築したとがめられ、信濃の5万石に減転封され、その地で果てました。

広島での領国経営では、検地の結果を農民に公開して負担を少なくし、寺社の保護に熱心だったともいう。しかし、武功派らしい日頃の粗野のふるまいが、秩序を重んじる時代になつて取り残されたのだ、とも触れています。

最後にもう一つ、気になることが残りました。50万石大領主の福島正則が、領内視察を兼ねてというものの、25里以上の最果ての地まで泊まりがけで、本当にやってきたのだから、とやう疑問です。地方での家来筋の横暴にたまりかねて、作り上げたフェイク（にせもの）ではないのか。福島正則伝承は、農民と商人だけの町の反骨の産物ではないでしょうか。

今回は、「上野池は庄原発展の引き金か」について調べてみます。

## 「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やない）

（人間の脳は刺激を与えると3歳までに約80%、10歳までに90%できあがる）

- ・ 望ましい親子関係をつくる。「しつける」のではなく「しむける」
- ・ 日頃から目に触れるものを声に出して語りかける → 脳を刺激する
- ・ 親子の絆や情緒が安定 ←



0~3歳：4800円（週1回）。4歳~小6生：算数・国語（各5500円、週2回）。

お気軽にご連絡くださいね。

#### 4. シーボルトの「日本植物誌」

シーボルト（1796～1866）は、オランダ商館（出島蘭館）の医師として来日し、西洋医学を伝え、そして多くの蘭方医を育てたばかりではなく、日本滞在中（1823～1828）に多くの動植物の標本・生品などを蒐集してオランダへ持ち帰り、「日本植物誌 Flora Japonica」、「日本動物誌 Fauna Japonica」、そして、日本研究の総合的な研究書である「Nippon」の3部の大作を出版してヨーロッパへ広く日本を紹介した学者でもある。とりわけ、「日本植物誌 Flora Japonica」と「日本動物誌 Fauna Japonica」は、日本の動植物に正式な学名をつけて記載しているから、分類学上の視点からみて、日本の動植物研究を少なくともヨーロッパ並の水準まで高めた日本の動植物学研究の出発点ともいえる大著である。

「日本植物誌 Flora Japonica」は、精密に描かれた植物図を合計150の図版にまとめられ、2巻にわけて出版された。

第1巻は100図版に192ページの記載・解説をつけて、1835年に出版された。そして、第2巻は50図版へ89ページの記載・解説をつけ、第1巻が出版されてから35年後の1870（明治3）年にオランダのライデンで刊行された。「日本植物誌 Flora Japonica」記載はツッカリニ（J.G.Zuccarini）が執筆し、シーボルトに協力している。

精密な図をつけ、それぞれの植物に学名をつけた上で記載されていることを考えに入れると、本格的な日本最初の植物誌といえる。

「日本植物誌 Flora Japonica」の図版12（Tab.12）は、スカシユリ（図1）である。この図は中央にスカシユリの茎の一部を描き、花と蕾をつけた茎を左に重ね、花が右上に大きく描かれている。そして、下部に花卉と1本

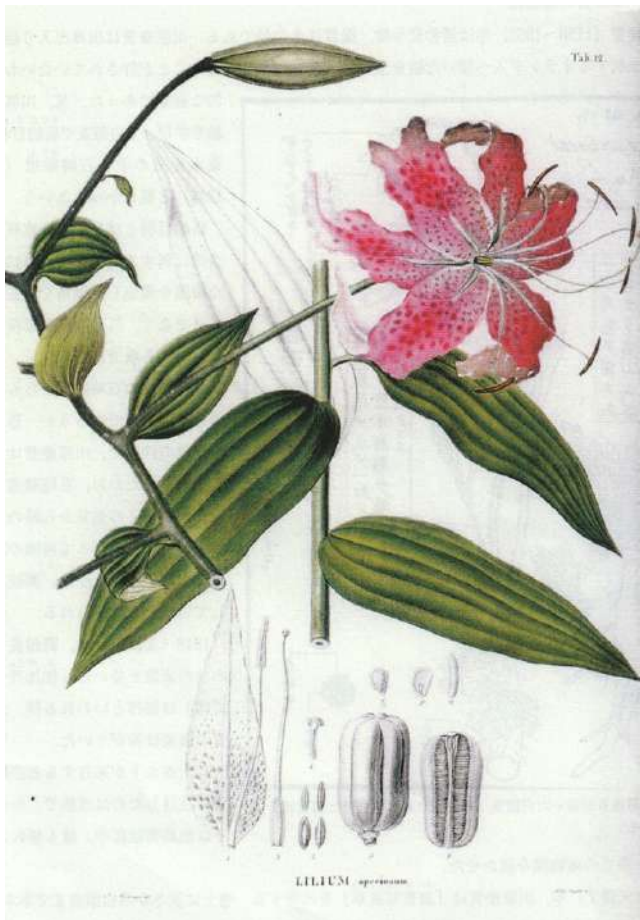


図1 スカシユリ  
（講談社版「シーボルト植物図譜」による）

虫と草木と人びとと ⑥2 中村慎吾

## 「植物画とは何か —日本の植物図譜を中心に—」(6)

著者紹介…一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。



シーボルト (1866 年の肖像画)  
(講談社版「シーボルト植物図譜」による)

の雄しべ・雌しべなどの部分図をつけ、植物図譜にふさわしい植物図(植物画)となっている。岩崎常正が描いた「芍薬」も見開きにシャクヤクの大輪の花を独特の構図で描いているが、細密さではスカシユリに著しく劣っている。スカシユリの花を見ると、生品を写生したのではなからうかと思える出来映えであるが、これは川原慶賀等日本の画家に描かせた写生図を下絵にして描いたからという。

前に記したツウンベリーの「Flora Japonica」にもいくつかの図がある。ツウンベリーが新種として記載したオトコエシは、スカシユリのように彩色されていない図であるが、スカシユリ(図1)の単色に描かれている部分に比べて数段見劣りがする。ツウンベリーの「Flora Japonica」が出版されたのは1784(天明4)年、シーボルトの「日本植物誌 Flora Japonica」の第1分冊が出版されたのは1835(天保6)年、その間、51年、植物図の技法と印刷技術が飛躍的に進歩したことを物語っている。

## 「つれづれ歌談」<sup>23</sup>

松岡初枝

水面(みのも)に浮かぶ花びらが流れ去る頃、初夏を告げる鳥たちの声が、楽しげに聞こえてきます。夏鳥といえども何と云っても霍公鳥(ほととぎす)。時鳥とも書きます。大伴家持はほととぎす好きで有名でした。

・ほととぎす思はずありき木(この暗のかくなるまでになにか来鳴かぬ

・ほととぎす夜鳴きをしつつ我が背子を安眠(やすい)な寝しめゆめ心あれ

・我がここだ待てど来鳴かぬほととぎすひとり聞きつつ告げぬ君かも  
三首 大伴家持

一首目、木の葉影が暗くなるのに、どうして来て鳴かないのかい。



二首目、親友の大伴池主(いけぬし)に送った歌で、ほととぎすよ、夜鳴きして友を寝かすなよ、しっかり鳴けよ!二人は冗談を言い合える良き友で、「あいつを寝かすなよ」なんてユーモア歌を送ったのです。三首目、もうひとりの友人、久米広繩(ひろつな)には、うちには来ないのに、君の家では鳴いているんだってね。一人占めして、どうして教えてくれないんだよ!こうなるともう、大人気無い程のほととぎす愛です。

・ほととぎす鳴きしすなはち君が家(や)に行けと追ひしは至らむかも  
大神女郎

大神女郎は、家持の愛でぶりを知っているのです、私のところではなく彼の所へ行ってあげてネ、と鳥に言ったけど、そろそろお宅に着いた?優しい女郎は詠んだ後「ヤレヤレ、お疲れさま」といったところではないでしょうか。

平安の頃も、他人より先に初音を聞いたと自慢したくて、山奥まで行ったようです。話の中心のこの鳥、鶯などの巣に托卵するので、卵を孵化させた親鳥は、自分達と異い鋭く鳴く子に、さぞや驚いたことでしょう。

「あの、この本なんですけど……」

差し出された本を見て首を傾げた。「月光の雫」というタイトルや、知里悪太郎という著者名に記憶はなかった。奥付を確認して、自費出版なのだろうと推測した。感想をもらうために、著者の東京の住所が記載されている。出版は平成元年、今から三十年以上も昔だが、保存状態は良好だった。

値札を確認して驚いた。店のスタンプを押したタグには、千五百円の値段が記入されている。自分の字ではないことはすぐにわかった。

「どこの棚に置いてありましたか？」  
「小説の単行本の棚です」

作者の名前の五十音順に並べている棚だった。それだけに、記憶になり作家の本を並べている可能性は低かった。

「おそらく、うちの本ではないでしょうね」

理由を説明すると、驚いた顔をされた。六十代の初老の男性で、一カ月ほど前から店に顔を出すようになった。老後を故郷の田舎で過ごすために、実家の古民家を改装して、夫婦で移住して来たという。かなりの本好きで、たくさんの本を読み込んでいることは、購入する本ですぐにわ

かった。

「誰かが勝手に棚に入れたということでしょうか……」

そういうことなのだろうと頷いたが、不思議であり、気持ち悪くもある。「売ってもらえますか？」

財布を取り出して、五千円札を差し出した。

「それは困ります。本当の持ち主が現れるかもしれませんから」

かなくなってしまうてね。それが、不思議なことに、以前に住んでいた名古屋の古本屋で、この本を見つけたんです。そのときは、百円本の棚に入っていました」

「買わなかったんですか？」  
温和な顔に、苦笑が浮かんだ。「たぶん、嬉しかったんだと思います。百円とはいえ、自分の本が商品として売られている。誰かが買って、読

かなくなってしまうてね。それが、不思議なことに、以前に住んでいた名古屋の古本屋で、この本を見つけたんです。そのときは、百円本の棚に入っていました」

# 月光の雫

しずく

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑥8

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「わたしの本なんですよ」

思わずエツと声を上げてしまった。

「若い頃、同人誌に入っていたことがあるんです。作家を夢見ていましたね。しかし、才能がないから駄目でした。踏ん切りをつけるために、この本を出したんです」

本の表紙に視線を落としました。

「同人仲間や友人に配って、何冊かは残しておいたのですが、いつの間に

しばらく間を置いて、どうするか考えた。

「もう少し様子を見させてください。この本を置いた人物が、何か行動を起こすかもしれない。もし、そのまま棚に並んでいるようなら、無料であなたに差し上げます」

「お願いします」  
差し出された本は、神吉拓郎の「私生活」。昭和五十八年下半期の直木賞受賞作で、十七の「短い」短編が収められている。都会で暮らす市井の人びとの「非日常」が切り取られ、ペーソスで程よく味付けされている。腹八分目、いや六分目辺りでストンと幕が下りてしまい、余韻がしばらく心に残る。「うまいなあ」と心の中でうなってしまう。

「では、三百五十円と千五百円で、千八百五十円ですね」  
怪訝な表情を浮かべた。

「かばんの中に、もう一冊入ってますよね」  
卓上の鏡の位置を調節して、背後が見えるようにしていた。

彼女は強張った顔でわたしを睨んでいたが、観念したようにおずおずとショルダーバッグから本を取り出



した。

「やっぱり、志津子でしたか……」  
「気づいていたんですね」

「わたしの本が二度も古本屋で売られていて、それに出会うなんて偶然はありませんからね」

志津子とは、知里さんの奥さんである。知里さんから、「月光の雫」が百円本の棚に並んでいることを知った志津子さんは、実際に見に

行ったのだという。知里さんとは違い、無性に腹が立ったそう。夫の才能が、百円で安売りされているような気がして、すぐに買い取った。

「あなたに、また小説を書いてもらいたかったそうです。自分の本を目にしたら、かつての情熱が甦るかもしれない。志津子さんの父親が病で倒れて、あなたに名古屋の実家の不動産屋を継がせてしまい、自分の夢を断念させてしまった。そのことが、ずっと負い目だったそうです」

知里さんが苦笑を浮かべた。

「過大評価です。彼女とは、同人誌で知り合ったのですが、わたしの作品が酷評されても、彼女だけは評価してくれましたからね」

確かに、千五百円の価格は高すぎる。小説の単行本は、大概が三百円前後の値段をつけている。他の人に買われないための予防処置でもあったのだろう。

「不動産屋を継ぐときに、ホッとしたのを覚えています。これで、新しい作品を書かなきゃいけないというプレッシャーから逃れられる。新人賞にも落選続きで、内心、自分の才能に見切りをつけていたのかもしれない」

寂しそうに笑った。

「それに、本当に小説に命をかけているのでしたら、どんなことがあっても続けています。家族や親を捨てても続けています。筆を折ったりはしませんよ。そんな強さはわたしにはなかった。わたしは優しい人ではない、弱い人間なんです」

今までの鬱屈を吐露するように訴えた。

「つまらない愚痴を聞いてもらいました。志津子の気持ちは、ありがたいと感謝しています」

本を手にして、深々と頭を下げた。

『月光の雫』、おもしろかったですよ」

背中を声をかけた。浮浪者の男と地元の少年が、人柱伝説のある溜池の畔で一晚を過ごす物語だった。バケツに汲んだ池の水に満月が映っている。それをコップで掬って、自作の濾過器で濾して、お湯を沸かしてお茶を飲むのである。

古本屋にはいろんな本が集まってくる。弱い人間が書く優しい物語があってもいいではないか。

知里さんが「月光の雫」を軽く持ち上げて、そのまま店の外へと出て行った。

今日は夏入り（げいり）、夜は満月である。

# FEBC



# 1566

Listen to His voice

☎180-8790

武蔵野局 郵便私書箱36号

キリスト教放送局

日本FEBC行

あなたによりそ

キリスト教放送局 日本FEBC

●AMラジオ1566kHz

毎日夜9時30分～10時45分

●インターネット放送

www.febcjp.com スマホで聞ける!

FEBCは旧新約聖書を神の言葉と信じ、使徒信条を告白する超教派のキリスト教放送局。選りすぐりの20以上の番組を毎日放送。無料聖書通信講座やメールによる相談も。

《PR 広告》

庄原FEBCの会

特別連載⑧

# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

中秋の名月 旧暦の八月十五日、今年の九月十日前後はちょうど満月に当たる。旧暦では七月から九月までが秋で、八月を「中秋」（仲秋とも書く）と呼んでいたため、この日が「十五夜」でお月見、名月、「中秋の名月」

などと呼ばれる。俳句・短歌に使われるのが「季語」である。秋の「季語」の中でも、最も奥が深いのが月である。月を表現する言葉の中で、最も有名なものが「中秋の名月」であろう。

この「中秋の名月」は、古くから

詩歌や俳句の材料にもなり、今宵（今夜、今晚）の月、三五（さんご、十五、三五の月）夜、望月（もちづき、満月のこと、旧暦十五日の月、満月に当たる日を望の日という）夜、名月（旧暦八月十五夜の月、中秋の名月）と詠まれている。

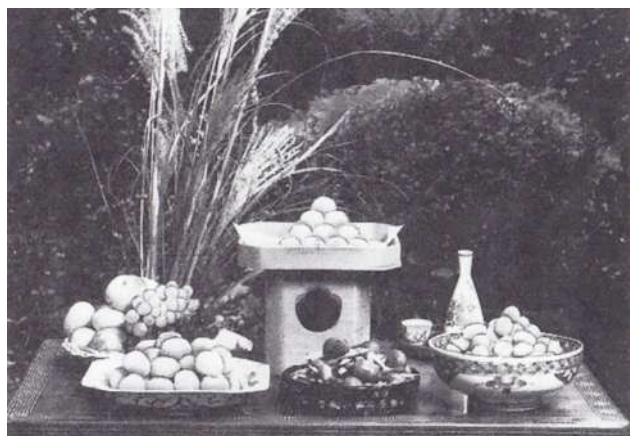
ほかに、八月十五日の夜のことを指す「良夜（りょうや）」という季語があるけれども、俳人からすれば「十五夜」などの言葉よりこちらの方が、調べが美しく感じられるだろう。

暦がない時代には、月の満ち欠けによって、おおよそ月日を知り、農事を行なった。十五夜の満月の夜は、祭儀の行なわれ



る大切な節目であった。そして、観月の好時節でもあり、月下に酒宴を張り詩歌を詠じ、ススキを飾り、月見団子・里芋・枝豆・栗などを盛り、神酒を供えて月を眺めて楽しんだ。

この「中秋の名月」を鑑賞する行事は、中国の唐の時代に野菜や果物を供えて月を拝み、鑑賞したという記録がある。それが平安時代のころ日本に伝わり、「観月の宴」として貴族のあいだで行なわれた。そして、武士や町民へと次第に広まり、江戸時代になると庶民にまで広がった。農村では農耕行事と結びつき、農作を祈って畑でできた秋の収穫物、特に里芋を供えていたことから、この



豊作を祈って畑の収穫物も供えられた

「中秋の名月」は「いも名月」とも呼ばれている。

中秋のお月見は、もとはサトイモなどの農作物の収穫儀式であったと考えられている。添えられているススキは本来、収穫物を悪霊や魔物や災いから守り、翌年の豊作を願う儀礼植物としての役目があったようである。また、稲作に於いても収穫の儀式に特別な意味を込めて、ススキは使われたようである。それは、ススキにはテキリグサの方言があるように、葉辺は鋭利で、茎の切り口も鋭い。うっかり触ったり、踏むとけがをするところからきているようである。

ほかに、十五夜に行なわれる珍しい行事がある。九州地方で行なわれる綱引きで、農耕祈願・年占い行事の一つである。鳥取県では、この日初めて芋を掘る日として「芋の子誕生」と呼ばれたりする。

悪習として廃れたが、地方によれば十五夜の夜だけは、他人の畑の果物や作物を盗んでもよいなどという風習があった。これを、秋田県仙北郡に伝わる「片足御免」（他人の敷地に片足を踏み込んで取るぐらいなら公認）とか、長崎五島の「まんだかな」と呼ばれる風習がこれである。

## 海外旅行ツアーコンダクター・エピソード⑥

# ケニア編2・「写真撮影禁忌と野生動物が集まる宿」 山崎 允まこと

「開発途上国では警察官、軍隊、橋の写真撮ることは厳禁です！」

お客様にはそう警告する。何故なら、彼らが装備している銃、剣等のメーカーが判明し、橋はどのくらいの爆薬で、どのくらいの量で爆破できるかが判明するからで、保安上の機密にあたる。加えて、無断撮影は彼らのプライドを傷つけることになる。

しかし最近では、あらかじめ撮影をお願いすると、「テン・ダラー」と言っておモデル料を請求してくる傾向がある。マサイ人は最初、「自分の魂がカメラに吸い取られてしまう」という恐怖心があったものの、現在は金か、目薬等を要求してくるようになった。このカメラ撮影の警告、バス旅行の初日にお客様に丁寧に「説明」と「お願い」をしていたにもかかわらず、その数時間後に事件が発生した。道路の前方で、バスポート・チェックが行なわれていた。バスが止まろうとしてスピードを緩めると、道路いっ



ケニアのロッジ「ジ・アーク」  
(オーダーメイド旅行会社「Teestyle」のサイトより転載)



ケニア国旗（中央はマサイ族の盾と槍）

ぱいに移動式バリケードが上げられた。その光景に興味を持ったお客様が一人が、カメラを構えた。バリケードを押している警察官が気づいた。

時すでに遅し！ 彼らがこちらに向かってくる。私は、すぐさまお客様のカメラを取り上げて、フィルムを無造作に取り出して、それを警察官にかざして見せた。私にできるこ

とはそこまでである。あとは、我々の頼りになる味方、イングリッシュ・スピーキング・ドライバー（英語を話すガイド兼運転手）に交渉を託した。その結果、最寄りの警察署にバスごと連行されたものの、バスドライバーが奮闘してくれて、約一時間後に解放された。みんなで彼に感謝して拍手した。

お客様は事前に私から警告を受けていた直後のハプニングであったため、比較的冷静に対処していただくことができた。事件後も、普通の旅行では経験できないことだと了承もしていただいた。私が細かく事例を

挙げて説明していたのが奏功した。その説明を怠っていたら、と思うと背筋が凍りつく思いがする。

その後は何事もなかったように、ケニア中央部にある非常にユニークなロッジに向かった。「ジ・アーク」、ノアの箱舟（ノアズ・アーク）にちなんで名付けられた。木造三階建てで、建物の前庭ならぬ「前沼」に、わざわざ塩を混ぜ込んで、野生動物を招き寄せる。動物たちが現れると、廊下のブザーが鳴って知らせしてくれる。客たちは防寒のためパジャマの上に毛布を羽織って起きて来る。

投光機の先の動物に目を見張ると、ぬかるみに濡れた体をぎらぎらと反射させながら、それぞれの生活の一部を、まるで「ショー」のように我々に見せてくれる。出演？する順序は、いきなり真打の象だ。やがて、ヒツポ（カバ、ヒツポポタマスの略）の大型で威厳のある役者も登場。明け方ぐらいになると、前座格の鳥類となる。

カバたちの背中に数羽の鳥たちがとまり、オレンジ、白、黒のカラー・コーディネーションされた体が朝日に輝いて、一晩中繰り広げられたショーが終わるのです。

## どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

花冷えの鏡へ髭を削りし顔

近藤 昌平

幾世代生きて生まれ燕の巢

富久光

気掛かりな戦火は止まず散る桜

片岡 正人

気に入らぬ風でもなびく柳かな

隆愚

侵攻になすすべもなく弥生尽

大槇 三代子

戦火遠く山里の路毛虫みち這う

赤川 冬人

野辺送りすらされぬまま横たはる

松岡 初枝

軀むくろの上に涙雨降る

## 投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「和風月名」

「和風月名」とは、旧暦における日本独特の月の呼び方です。旧暦を使っていた時代では、月の呼び名は今のようにならずに数字で表すのではなく、

日本人の自然観や季節感が豊かに表現された名称が使われていました。万葉時代には使われていたようですが、それぞれ語源には諸説あり、明確には分かっていません。旧暦と新暦では、約一カ月のずれが生じますが、現代でも同じ月に割り当てて使われています。実際の月の季節感と差異があるのはそのためです。



◎一月睦月(むつき)・・・新年を迎える月。お正月に親族が集い、睦み合う月という意味の「睦び月」がなまって「むつき」になったといわれます。◎二月如月(きさらぎ)・・・中国で「如月」という字が使われていました。旧暦では草木の芽が張り出す月。「草木張り月」が変化したという説、陽気がさらに来るので「気更来」という説などがあります。「衣更着」という字を当てたのは後世になってからです。

「心の栄養」

赤川仁洋

最近、本が読めなくなりました。特に小説が読めない。本誌の「今月の三冊」で、今月は何を載せようかと考

えて、小説のストックがないことに気づいた。前回の「赤ヘル1975」以来、まったく読んでいない。

以前にも、これといった本に巡り会えなくて、慌てて何冊か読み足して間に合わせたことがあるのだが、読もうという元気が出てこない。ページ割の関係で何度か延期したことはあるのだが、本が読めなくて休載したのは今回が初めてだ。

思い当たる原因は一つ、ロシアのウクライナ侵攻である。信じられないような過酷な現実の前に、フィクションが白々しいものに思えてしまう。思い返せば、阪神淡路大震災や東日本大震災のときも同じだった。

古本の整理をしても、読みたいという意欲がわいてこないのだから、楽しさも半減。わたしの心の一番の栄養源は活字なので、どうしても元気が出てこない。

それにしても、君主制のアンチテーゼとして誕生した社会主義国家が、帝王と双児の独裁者を生み出すのは皮肉か必然か。ロシアは大ソ連の幻影を追いかけている。大日本帝国の末裔である「戦争を知らない子供たち」に何ができるのか。モヤモヤしたまま、日常生活は過ぎて行く……。

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

- **一 硬式テニス参加者募集 一**  
MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)  
場所：三次運動公園の屋内&屋外コート  
・ 火曜日 (9:30 ~ 12:00)  
・ 水曜日 (9:30 ~ 12:00)  
・ 土曜日 (10:00 ~ 12:00)  
連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
  - 教室&講座案内
  - イベント情報
  - あなたの大切な本の紹介
  - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な  
活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品  
の展示販売を、どら書房の一角でしてい  
ます。  
茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を  
展示しています。あなたのお気に入りの逸  
品が見つかるかもしれません。  
※天井が低いので頭上注意!

## どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。  
毎週水曜日の朝に入荷予定。

- **黒ニンニク好評販売中!**
- (青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。  
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの  
効果が期待できます。  
(80g入り 500円)  
※売り切れのときはご容赦ください。

## まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。  
無料の漫画ルームもあります。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっ  
ています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

## 編集後記

◇ 今月号は14ページ。これが現在のベースになります。寄稿がありましたら、調整&増ページで。大いに歓迎します。

◇ 芸備線ストロールで入った「高尾の湯」名湯でした。今度は、本でも持ち込んで、のんびり過ごしたいですね。休憩室を利用した半日の料金が千円、一日だと千二百円、他の事も含めて詳細は「庄原観光ナビ」で紹介されています。

◇ 先月号の「虫と草木と人びとと」で、「さんかくそう」と「及己」の画像が間違っていました。初期配布のものは訂正していません。申し訳ありませんでした。

◇ 野球とサッカー、赤と紫の活躍が心の栄養源です。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183  
協賛: 九日市愛好会

# ひょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 4 年 5 月 9 日 (月) 9:00~13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

## TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

5 月 8 日(日)~5 月 10 日(火) 10:00~15:00

**植物の細密画作品展**

★どら書房→休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座「まかない食堂」再開 10:30~12:00

「うた声喫茶」開催 13:30~15:00

★きくや→総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍→九日市スペシャルで餃子 200 円！

★カフェクラウド→タピオカドリンク 100 円引き

九日市特製ピタサンド 600 円

★HONMACHI STAND→コーヒー 100 円引き

## 出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.in>

